

令和五年十二月吉日初版作成

人生最高の徳を積む

高嶋善三郎

目次

●輝かしい大往生・・・・・・・・・・・・・・・・	3
●素晴らしい往生を迎えるには・・・・・・・・	3
●宇宙神と神々の関係・・・・・・・・・・・・	4
●人生最高の徳を積む・・・・・・・・・・・・	6

お願い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

（スマホ）090-33346-6619

（メールアドレス）zensan@peach.ocn.ne.jp

輝かしい大往生

令和五年十二月七日、私は、毎月参加させていただいていた集会の責任者として活躍されていた法友の葬儀告別式に参列しました。

家族葬でありましたが、近隣に住む法友として私達六名が参列させていただきました。

斎場に入ったとき、祭壇に飾られた遺影の写真から故法友がにこやかな笑顔で迎えてくださいました。故人が好きな色であったピンクの光を四方に発し、生前以上に生き生きとされていたのには驚きました。そして、最後のお別れの時、御棺の中にご家族の写真や五井先生のお写真を入れられた時、五井先生の写真から純白光線が放射されていることに気付きました。五井先生がお迎えにきてくださっているのだと直観しました。亡くなられた法友はなんと幸せな方なんだろうと思いました。

ご家族のお話によると、今年の五月に体調不良で入院され、八月に退院され、ご自宅で療養されていましたが、十月に再び入院され、ご帰神されるまで、病院で療養されていたとのことでした。十一月二十三日危篤状況になられ、担当医師が目の瞳孔の開き具合で臨終を確認中、家族の人たちが、五井先生の高弟である、ある先生の名前を発したとき、目を開き、子供さんがスマホからYouTubeに掲出されている五井先生の祈りの録音を囁らしたとき、声を発せられたそうです。そして七日間五井先生の祈りやご法話の録音を聞かれ、十二月一日に

安らかにご帰神されたとのことでした。

故人は、若い時からお母様に連れられ、聖ヶ丘の統一会や各集会に参加され、信仰歴も長く、講師、祈りのカウンセラーや祈りの伝道師として活躍されていたことを考えれば、その素晴らしい往生は当然なのかもしれません。

素晴らしい往生を迎えるには

どのようにしたら、このように素晴らしい往生をとげることができるのでしょうか。『続宗教問答』問105「人間はどうして死ぬことを恐ろしく感じるのでしょうか。今迄に何回も生まれ更(かわ)って来て、死の経験をし、他界の経験をしていると思いますのに、どうしてでしょうか。」を参考に整理します。

素晴らしい往生ができない人は、死を恐れている人が多い。

死を恐れる人は、死後の世界の不明な点から、自己がそこで消滅してしまうことの恐れから、死を恐れてしまうのです。

死後の世界について次のように解説されています。

「私たちが、これが人間自体だと思っている肉体身は、実は人間の一つの現われに過ぎず、人間生命は、肉体以外の他の身体、つまり、肉体身より微妙な波動をもつ、幽体とか霊体とか神体とかいう、違う言葉で言えば、エーテル体とか、アストラル体とかメンタル体とかブデー体という、種々の身体をもって活動しているのである。そして肉

体の死というのは、ただ単に自己が肉体波動から、より微妙な他の生命波動に移って活動することに過ぎない。

自分は肉体身だけではないのだ、肉体身において、その環境において、誠心誠意の生き方をしていれば、かえって肉体身を脱げ出た、いわゆる死後には、肉体身の生活とはくらべようもない程自由な美しい環境で活躍することができるのだ。」

そして、そのためには、「私たちの死後の真実の姿を常に自分にいさかせておいて、その想いを潜在意識に入れておくことが大事なのである。これにより、自己の心がやすまり、死を恐れる気持ちが薄らいでくるものである。」と言われています。

さらに死の恐怖から抜け出すためには、次のような二つの観方や生き方をすることを勧められています。

「大事なことは、自己の生命は神よりきているものであり、神の心は慈悲なのだから、神が人間に対して悪いようにするわけではない、と信じて、神の心の中に常に入りこんでいることである。即ち真の信仰心なのである。真の信仰心というのは、神が罰を当てるとか、自分達の行いが悪いからといって恐れているような信仰態度ではない。真実の宗教信仰者は自己が神の分け生命であることを認識し、親神様の大愛に自己のすべてを託しゆだねて生活していける人にならなくてはならない。」

「死を恐れぬ人になるためにも、やはり神の愛を信じ、神への全託行に生きてゆくことが必要なのである。そこで私は、愛の神様をただ

神と呼ばずに、守護神と呼び、祖先の悟った霊を守護霊と呼んで、この守護霊、守護神が、いつもあなた方を守り続けておられるのだから、あなた方はよけいな心配苦勞をせずに、自己の置かれた環境で、守護の神霊に感謝を捧げながら、人事を尽くしていればよいと説いている。自分の身近に守護の神霊がいて、自分達の眠っている間も守りつけていて下さるのだ、ということは、どんなにか安心できることか。この守護の神霊は、その守られている人々が、生れる時から死後の世界までもついていくってくれるのであるから。守護神、守護霊に、死後のことまでもお願いしていれば、これほど安心なことはない。守護神はあなたを、肉体身において置かれていた環境より以上の世界に、つけていくってくれることは必定なのである」と言われています。

宇宙神と神々の関係

氏神様などの初詣の時期が近づいてきました。そこでどのように祈るのがよいのか教えてくださいというご質問がありました。そこで『愛すること』の「神と神々について」から整理してみます。

「普通、神と一口にいう場合は、宇宙の大神という意味で、万物の生命の根源でもあり、すべてのすべてであり、全知全能という、そういう神を思うが、現実としては、種々な神社があり、種々な名の神々が祭られている。

キリスト教の人や、知性人と称される人々は唯一神という神観をも

っているようで、神を神々というように観することが出来にくい人々が多いようである。その人々にとって、唯一神だけが必要で、他の神々の必要を感じないからなのであろう。

ただ、事實は、つねに唯一神があり、神々が存在するのであるで、他宗教、多宗派の人々と信仰争いするようになってしまい、宗教の本質から外れてしまう。」

神と神々というものの本質として、次のように言及されています。

「唯一神が唯一神のままではその働きができないので、種々な光に分かれ、種々とその機能を分けて働かれています。その光明の分かれの柱ずつ、その分けられた機能の一働き一働きが、神々と呼ばれている。」

その働き方から神々を分類してみると、

「神界だけで働かれておられた神、霊界まで働きを伸ばされた神、幽界まで働かれた神、肉体界にまで現れて働かれ。神去られた神、等々の各種の働きをなされた神々が存在する。日本中にある神社はそうした、唯一神の働きを各自分けられて働かれた神々をお祭りしてあり、信仰深き人々の祈りによつては、そこに現われるのである。」

「この神々をさらに細かく分けると、その中には土地を守っている氏神様という神様がおられる。そして一人の人間の誕生を見守っておられた、産土の神もおられる。その人が生まれた土地の神様は、産土の神であるので、次々と住居を変えたとすれば、その土地土地に氏神様がおられるので、その守護の元にその土地に住んでおられるので、

生れ故郷の産土の神と、住んでいる土地の氏神様とは常に感謝をささげなければならぬのである。

人間は自分独りで生きてゆけるような感じをもっているが、両親や周囲の人々の恩恵は勿論のこと、こうした眼には見えぬ神々の守護を受けながら生かされていることを知らねばならない。そういう人間一人一人のために守護神、守護霊がその人その人専属で守ってくださいっており、その人の感謝の足らぬところ、考えの足りぬところを、代わって神々や人々に感謝して下さり、考え下さって、不幸や災難を少なく、天命が完うさせようと下さっているのである。」

以上のことを理解しないで、

「ただいたずらに、なんの理もわからずに、神様神様と神詣でしたところで、何のことはない。現世利益を得るためだけの神詣でなぞは、実におかしなもので、過去世で徳を積んでおかなければ、いくら神様にお願しても現世利益のあるものではない。現世利益というものは、過去世の貯蓄がそこに現われてくるものなのだ。故に神様に現世利益を願うなどということは、真理の面からいえば愚かしいことだと言えるのである。頼まずとても神や守らんというのはそういう真理をいった言葉である。」

では何のために神詣でをし、何のために宗教信仰するのかというと、「これは、神様に自己の本心の開発してもらい、正しい道を歩んで行けるように、というためのもので、たとえていえば、軌道を外れている車を、軌道に乗せてもらうための宗教信仰なのである。」

そういう正しい軌道に乗り、本心を開発してゆくに従い、その人の生活から病気や貧乏や不幸災難が、知らぬ間になくなっていくゆく、というのが、宗教信仰の本筋なのである。

故に、いたずらに神社仏閣をお詣りしているから、その人が信仰が深い、というわけにはいかないのである。もし低級な幽身(かみ)にご利益の願いをして、過去世に徳を積んでいないのにご利益があったとすると、それはその幽身(かみ)への借財になるので、どうしてもその借りは必ず返済しなければ、ならなくなる。今迄繁盛していた店が急に駄目になったり、思わぬひっかかりで店をつぶしてしまったり、変な病気になったり、という、不幸災難が出てきたりするのである。」

そこで、次のように祈ればよいとされているのです。

「神社仏閣を詣でるにしても、自己の現世利益など頼まずに、人類や国家の安泰、いいかえれば、世界平和のお祈りをして、感謝の意を表してくれば良いのである。そうすると、それがその人の徳になって積まれて願わずとも、その人の現世利益となって帰って来るのである。」

人生最高の徳を積む

同じく「神と神々」において、世界平和の祈りは、次のように自ずと徳を積んでいるのだと言われています。

「人は常に他のための働きをすることがよいので、その行為が自ず

と自己の徳となって積み重ねられるのである。国の為、人類の為という祈りの日々は、知らぬ間に、その人が大きく徳を積み重ねていることになるのである。そこで、私の提唱している世界平和の祈りなどは、いつの間にか、唱える人が徳を積んでいることになる。何故ならば、世界人類が平和でありますように、という言葉は、そのまま人類愛の心の現われであり、なんのかんのと、自己の現世利益の頼みごとをしなくとも、その人の前途は知らぬうちに開けてくるのである。

世界平和の祈りの後で、自己の願い事をして良いが、願わなくとも救世の大光明のひびきは、あなたの人類愛のひびきにあわせて、あなたの生活を明るくものにしてくださいるのである。」

今回最初の項「輝かし大往生」で紹介させていただいた方は、茨城県守谷市で守谷集会を主宰されていた浅野彰子講師です。ご自分はお身体が病弱であったにもかかわらず、諸先生を迎えて、私達近隣の法友に学びの場を提供してくださいました。

その楽しい学びの場に参加させていただいた私達は、ただ感謝するのみですが、実のところそのような評価以上に、人生最高の徳を積まれているのであり、それが輝かしい大往生につながったのだと思います。心よりお祝い申し上げたい気持ちです。

そして私達も、世界平和の祈りや神聖復活の印を組むなどのご神事を通して、人生最高の徳を積まさせていただいていることをあらためて知るべきでしょう。